

## 対談「足元から環境の時代を」

11月1日、大阪で宮本憲一先生と嘉田由紀子・前滋賀県知事の「対談」が行われた。まずは宮本先生、次に写真のように嘉田さんの講演である。嘉田さんは、たくさんのスライドを使い、2期8年の知事時代を振り返り、「足元から環境の時代」に迫った。著名な環境社会学者として知見と迫力があり、多くの聴衆を引きつけるものがあった。講演を聴いていて、前に読んだ嘉田さんの『知事は何ができるのか』風媒社、2012年を思い出した。目次だけ紹介しよう。



第1章「共感、軍艦と手こぎ船に対比された知事選挙」、2「信念、税金のムダ使いもつけない、新幹線駅の中止」、3「攻防(上)地域のことは地域で決める」、4「攻防(下)ダム計画をめぐる国との闘い」、5「再生 琵琶湖の受難の歴史に光を!」、6「命の絆 子育て、仕事、人生の見送りまで支え合う」、7「共生 生命・自然に根ざした文化、誇りをびわ湖から」、8「自立 未来可能な地域経済の強化へー自然エネルギーと卒原発」、9「政治は未来をつくるもの リスク社会を生き抜く政策は地域から」

知事時代の活動につづき、なぜ3選に出馬しなかったのか、先の知事選をめぐる動きを語る。知事という仕事、とりわけ「既得権」を打ち破ること、今後に引き継がれる成果と課題を提起した。環境社会学者としての実績にもとづく、知事としての政策と実践から示唆を得ることができた。対談では、とりわけ次の2点がとくに印象に残った。

一つは原発問題である。滋賀県は「原発銀座」の福井県に隣接しており、国に先駆けて独自の対策を打ち出してきた。「3・11」の福島原発事故は、史上最大最悪の公害問題である。コミュニティが破壊され、自治体の存続自体が危ぶまれる。被害にあった住民が分断され、差別されている。この現実をしっかりと見据えなくてはならない。

もう一つは安倍政権の経済政策である。嘉田さんが「アベノリスク」と呼ぶように、消費増税を見据えて、「賭け」に近い金融緩和が実施されている。この点で嘉田さんがアダム・スミスについて述べたのをうけ、宮本先生は『道徳感情論』について語る。数日後、名大図書館で水田先生の本を読むと、対談で話題になったことが書かれていた。

「スミスの出世作は『国富論』よりも、『道徳感情論』であって、死ぬ直前のしごともその増訂であった。-----スミスは、各個人が自分の利益のために、なにをしてもいいといったのではなく、各人が利己的活動を、社会的に承認されるようなかたちに自己抑制することが、結局は個人にとっても社会にとっても、有利になるのだと、いったのである。」(水田洋『時流と風土』お茶の水書房、1985年)

(2014年11月8日)